

生活介護事業所における集団活動が重症心身障害者の意味のある作業となる支援

博士後期課程 保健福祉学研究科
62020003 : 杉山いずみ
研究指導教員 : 笹田 哲 教授
研究指導補助教員 : 木村芳滋 教授
川名るり 教授

I 本研究の背景

日本の障害者施策は、施設入所が中心であったが、1950年代後半に、ノーマライゼーションの理念が国際的に浸透し、日本でも障害者が地域で生活が続けられる支援が求められるようになった¹⁾。障害福祉サービスである生活介護事業は、障害者総合支援法に基づく日中活動系サービスで、常時介護が必要な人に対する事業である。在宅で暮らす重症心身障害者（以下、重症者）は、大人としての社会参加の場として生活介護事業を利用している。従って、生活介護事業所は、重症者の健康維持と生活リズムを作り、重症者が楽しめる意味のある作業を行い、社会参加の場としての機能が求められている。そして、生活介護事業所の生活支援員と看護師は、重症者との意思疎通を図って支援を行おうとするが、畳みかける業務に追われて重症者の反応を見逃してしまい、重症者との意思疎通が困難になることがある。さらに、生活支援員と看護師は、集団活動では何かをしなければいけないという思いが先行して、一方的な重症者への支援になってしまうため、集団活動が重症者にとって意味のある作業になっていないことがある。

本研究の目的は、生活介護事業所の集団活動が、重症者にとって意味のある作業となるために、重症者への支援について、作業療法士（以下、OT）と生活支援員および看護師が共に考え実践することによる効果を検討することである。

本研究の意義は、生活介護事業所での重症者の集団活動における課題を明確にし、重症者の特性に合わせた支援の方策について、他職種と検討して実践することで、重症者の支援を他職種と共有することができる。また、生活介護事業所の生活支援員と看護師が自らの力で現場の問題を明確にして検討することで、生活支援員と看護師のエンパワーメントにつながり重症者に対する支援の質の向上になる。

II 研究1：生活介護事業所における利用者の日中活動への参加の実態

利用者を作業参加の視点で分類し、作業参加の特徴に合わせた支援の方向性を検討した。

方法は、利用者 17 名に人間作業モデルスクリーニング²⁾ (以下、MOHOST) を実施し、MOHOST の下位項目の合計得点を用いて、クラスター分析で利用者を分類した。下位項目の合計得点を Kolmogorov-Smirnov の正規性の検定をしたところ、正規分布していない領域があった。よって下位項目の合計得点から、マン・ホイットニーの検定を行い各群間の差を調べ、Bonferroni の方法による多重比較を行った。統計処理には統計ソフト IBM SPSS Statistics ver. 25.0 を用い、有意水準はすべて 5%とした。さらに、分類された利用者の作業参加の特徴と介入方針を事例から検討した。

結果は、利用者は 3 群 (A 群, B 群, C 群) に類型化された。運動技能において、A・B 群と C 群は差が認められ、C 群は運動技能が最も低いため、集団活動において C 群は、ポジショニングや疲労に対する配慮が必要であった。そして 3 群の特徴として、A 群事例は、作業参加の動機付けがあるが受け身的に作業参加しており、B 群事例は、定型的な活動を行い傍観的に作業参加しており、C 群事例は、人に対する応答反応が微弱で睡眠パターンが多層化して、作業参加していなかった。

介入方針として、A 群事例は、新たな役割の創出や更なる挑戦により自己効力が向上するように介入を行う。B 群事例は自由な遊びを行い、探索から有能感・達成感を導き出すように介入を行う。C 群事例は、感覚欲求を満たす関わりから探索を促す介入を行うことであった。また、重症者は B 群・C 群に含まれており、生活支援員と看護師は重症者の反応を見逃すことがないよう環境を調整して、重症者が安心して探索できるよう介入することが示唆された。

Ⅲ 研究 2：生活介護事業所における生活支援員の重症心身障害者に対する集団活動支援

集団活動における生活支援員が行う重症者への関わりから、重症者への支援の内容を解明し、重症者への集団活動支援について検討した。

方法は、生活支援員と重症者が 1 対 1 で行っている集団活動の場면을 6 回ビデオカメラで撮影し、観察データを逐語録に起こした。そして、生活支援員の重症者への関わりを分析対象とし、分析には SCAT (Steps for Coding and Theorization)³⁾ を用いた。データを説明する概念は、コミュニケーションと交流技能の概念的枠組みで分析し、生活支援員の重症者への関わりを対象とした、テーマ・構成概念をカテゴリーに分けた。

結果、生活支援員の集団活動における、重症者への支援の構成概念は 44、サブカテゴリーは 15、カテゴリーは 4 つ生成された。カテゴリーは、【集団活動参加の誘い】【共同で行う集団活動】【良好な関係の維持】【表現の尊重】とした。

これらの結果から、生活支援員は、乳児に対する母親の対人交渉のように活動に誘い、身体の援助により共同で集団活動を行っていた。また、情動的コミュニケーションを通して、重症者との関係を深め、重症者に対して肯定的な感情を持つことが、重症者への支援に対する自信につながると考えられる。しかし、生活支援員の重症者への支援には、重症者の意志への働きかけが不十分であることが示唆された。このことから、生活支援員と協業して、重

症者の反応に合わせた身体的支援、重症者との楽しみの共有、重症者の興味に沿った集団活動の提供、重症者の反応に応答することを、支援に取り入れる必要があると考えられた。

IV 研究3: 重症心身障害者に対する集団活動支援を提供する取り組みによる生活支援員と看護師の意識の変化

OT と生活支援員および看護師が共に、重症者に対する集団活動支援における現場の課題と支援の方策を考えて実践することによる、生活支援員と看護師の意識や支援の変化を明らかにした。

方法は、参加型アクションリサーチ⁴⁾を用いて研究者が、研究参加者である研究メンバーと一緒に、重症者に対する集団活動支援について考えるアクションを通して、生活支援員と看護師の意識や支援に関する、データを収集し分析した。アクションリサーチは、現場における問題を明確にし、可能な解決策を探るために行う協働的介入であり、実践改善の意図をもって始まる研究である。

現場の課題は、集団活動のねらいと重症者の反応をみる視点が共有されていないことであった。課題解決のための計画は、集団活動のねらいを生活支援員と看護師に伝えて共有すること。そして、重症者の反応をみる視点に気づいてもらうことを意図した簡易的な活動参加記録を作成して、生活支援員と看護師が記載することであった。初期計画に沿って3ヵ月実践した、評価・内省では、生活支援員と看護師は安心して集団活動支援を行い、重症者の表情、目の動きなどに意識を向け、重症者の反応に気づくようになった。初期計画を再検討したところ、研究メンバーは生活支援員と看護師の重症者への支援の変化を実感し、実践を継続することを希望した。そこで、集団活動のねらいを定着させることと重症者の反応の記録を積み重ねることを再計画した。再計画に沿って3ヵ月実践した、評価・内省では、生活支援員と看護師は主体的に重症者が楽しむ支援を行うようになり、重症者の反応への気づきが広がり、反応の違いが判るようになった。重症者の変化は、MOHOST の下位項目である日課と社会集団が向上していた。しかし、重症者に対する支援の効果は、長期の時間をかけて検証する必要があると考えられる。

本研究から明らかになったことは、生活支援員と看護師が、重症者が楽しめることを実感することが、支援の達成感につながり、支援の自信になることであった。それを可能にしたのは、重症者と一緒に集団活動を行うことが共通の認識になり、安心して支援ができるようになったこと。また、立場や専門性が異なる生活支援員と看護師に対して、教えるのではなく活動参加記録の記載を通して、重症者の反応に気づき、その違いが判るようになったことで、自ら重症者を楽しませる支援に変化したことが考察された。

このように重症者が反応するという生活支援員と看護師に与える影響が、さらに重症者の興味を明らかにすることになり、また、重症者が活動を行うことの価値を生活支援員と看護師に与えることが、重症者の意志に働きかける支援につながることを示唆された。

V 総合考察

本研究における生活介護事業所での集団活動では、重症者が主体となって、集団活動に参加することが困難になっているように感じられた。集団活動を楽しむことは、重症者にとって意味のある作業であるといえる。そこで、重症者が集団活動で意味のある作業に参加するためには、重症者の特徴に合わせた環境が必要であった。環境は、物理的、社会的、作業的という 3 つの次元を含み、社会的環境は家族や介護者との人間関係と交流により構成されており、環境は人の行動を制限したり、強く方向づけたりする⁵⁾。しかし、生活支援員の支援には、重症者の意志に寄り添い、重症者の楽しみと興味を共有し、重症者の反応に応答する関わりが不足していることが示唆された。そこで、集団活動が重症者の意味のある作業となるために、アクションリサーチを行った。アクションの結果、重症者に行ってもらいたい集団活動のねらいが、生活支援員と看護師の共通の認識となり、ゆとりのある支援により、重症者も安心して集団活動に参加できるようになった。さらに、生活支援員と看護師が、重症者の反応に気づきその違いから、重症者の好きなことが判ることで、重症者が楽しめる支援が行われることで、重症者にとって意味のある作業となる集団活動に変化したと考えられる。また、介護者が重症者のニーズに対する理解を深めれば、仕事の満足と楽しみを高めることができる⁶⁾と報告されている。よって、生活支援員と看護師にとっても、重症者が楽しむという意味のある作業を支援することが、生活支援員と看護師の集団活動支援に対する達成感と自信につながるということが示唆された。

生活支援員と看護師の変化をもたらした OT の関わりは、集団活動における支援の状況を理解し、研究メンバーである生活支援員の集団活動の思いを共有した。そして、課題を解決する計画と実践において、研究メンバーが自ら考えて実行できるように関わった。さらに、生活支援員と看護師に一方的に、機械的に教えるのではなく、集団活動のねらいと重症者の反応をみる視点が共有できる、実践可能な計画を立て、生活支援員と看護師の変化に注目し適宜計画を修正した。草柳は、病棟で過ごす子どもが少しでも子どもらしい歓びを見せるようになったことを感じられたことは、看護をする喜びを看護師に与える⁷⁾と言う。本研究においても、研究メンバーが、生活支援員と看護師の支援により、重症者が楽しんでいる様子を見かけることで、生活支援員と看護師が重症者の支援を行うことの喜びを得ることができ、それが集団活動支援を行う自信につながるという。また、重症者に対する思いや自身の支援を振り返る機会を意図的に設定した。これまで、生活支援員と看護師は、重症者に対する思いや自身の支援について、尋ねられることはなかったと推測される。しかしインタビューにより、自身の支援を想起する機会が得られ、重症者の意思を読み取ることは難しいと感じていることを語る事ができた。先行研究において、他者と看護の体験や思いを共有する機会は看護師の心を軽くし、ストレスを軽減させる有用なサポートの一つである⁸⁾とされている。本研究においても、生活支援員と看護師が重症者との関わりや支援の悩み等を、他者に話す機会を意図的に設定したことが、ストレスや感情を緩和することになり、支援の質の向上につながったと考えられた。

引用文献

- 1) 遠山真世, 二木柳寛, 鈴木祐介: これならわかるスッキリ図解 障害者総合支援法. 翔泳社, 東京. 2015, pp.12-13
- 2) Parkinson S, Forsyth K, Kielhofner G(山田孝, 野藤弘幸, 小林隆司・訳): 人間作業モデルスクリーニングツール使用者手引書, 第2版. 日本作業行動研究会, 2008.
- 3) 大谷尚: 質的研究の考え方ー研究方法論から SCAT による分析までー. 名古屋大学出版会, 2019, pp.270-335.
- 4) 草柳浩子: アクションリサーチの進め方. 筒井真優美(編集)アクションリサーチ入門. ライフサポート社, 2010, pp.40-47.
- 5) Fisher G, Parkinson S, and Haglund L(笹田哲・訳): 環境と人間作業. Taylor RR(山田孝・監訳). キールホフナーの人間作業モデル, 理論と応用, 改定版第5版, 第7章. 協同医書出版社, 2019, pp.114-131.
- 6) A M Nieuwenhuijse, D L Willems, J B Van Goudoever, et al : The perspectives of professional caregivers on quality of life of persons with profound intellectual and multiple disabilities:a qualitative study. Int J Dev Disabil 68(2) : 190-197, 2022.
- 7) 草柳浩子: 子どもの大人の混合病棟で働く看護師の意識とケアの変化ーアクションリサーチを通してー. 日本看護科学会誌 32(4) : 32-40, 2012.
- 8) 江本リナ, 筒井真優美, 川名るり: 小児看護においてケアを提供するうえで課題と捉えた状況とその改善の試み. 小児看護研究 74(6) : 930-938, 2015.